

Eureka XII

六年制通信 No.14 令和6年7月5日(金)号

ゴンドラの唄、雑感

日曜日の朝、今を盛りの合歓木の赤い花を見ながら阪内川沿いの散歩をすませ、珈琲を飲みながら朝涼のひと時にオマル・ハイヤームの『ルバイヤート』を読んでいると、朝から酒を飲まなくてはいけない気になってきて困るのでした。今から千年ほど前のペルシャの詩人は酒好きらしく、例えば「夜は明けた、起きようよ、ねえ酒姫、酒を飲み、琴を弾け、静かに、しずかに！」とか「わが心の偶像よ、さあ、朝だ、酒を持って、琴をつまびき、うたえ歌。」とか、まあこんな感じです。朝から飲んでいますよね、絶対。千年前のペルシャの酒とはどんな味なのでしょうかね。そう言えば、ホメロスの『オデュッセイア』にはエーゲ海の形容として「ぶどう酒色の海」というのが何度も出てくるのですが、紀元前八世紀のワインはどんな色をしていたのでしょうか。あ、いやいや酒の話なんてどうでもいいのでした。失礼！

今の5年生が学習合宿に行った折、ユリイカのBGMが話題になって、結局先生はどんな歌が好きなのかと質問されたよね。それで、ちょっと色々と思い出したことがあるので紹介しましょう。『ルバイヤート』にこんな四行詩がありました。

45 時はお前のため花の装いをこらしているのに、
道学者の言うことなどに耳を傾けるものではない。
この野辺を人はかぎりなく通っていく、
摘むべき花は早く摘むがよい、身を摘まれぬうちに。

それで、最後の行を読んだ時に急に頭の中で「ゴンドラの唄」が流れたのですね。古い歌ですが、私、大好きなのです。卒業式の日に分身のクラスで生徒への餞（はなむけ）として歌ったことがあるくらいです。1番と2番の歌詞はこうです。

1 いのち短し 恋せよ乙女	2 いのち短し 恋せよ乙女
紅き唇 あせぬ間に	いざ手をとりにて かの舟に
熱き血潮の 冷えぬ間に	いざ燃ゆる頬を 君が頬に
明日の月日は ないものを	ここには誰も 来ぬものを

全部で4番まであります。大正・昭和の歌人吉井勇の作詞ですが、これにはヒント（というかそれ以上ですな）となった本があるのです。アンデルセン（「人魚姫」を書いた人）の『即興詩人』がそれです。アンデルセンはデンマークの人で、これのドイツ語訳を森鷗外が日本語に訳しました。こういうのを重訳と言います。岩波文庫の下巻にこんな一節があります。漢字を読みやすくして紹介します。「…その歌は人生の短き恋愛の幸あるとを言えり。ここに大概を意識せんか。その辞にいわく。朱の唇に触れよ、

誰か汝の明日なお在るを知らん。恋せよ、汝の心のなお少く、汝の血のなお熱き間に。白髪は死の花にして、その咲くや心の火は消え、血は氷とならんとす。来れ、かの輕舸の中に。…」ですが、いかがですか。よく似ていますよね。でも君たちにはまだ読みにくいかな。「心」は「むね」、「少く」は「わかく」、「輕舸」は「けいか」でゴンドラのこと。ベネチアのゴンドラね。映像で見たことあるでしょ。「ゴンドラの唄」の「いざ手を取りて かの舟に」の「舟」がこれ。ちなみに『大辞泉』の「輕舸」の項目には、出典として鴎外の『即興詩人』が挙げられています。

またロバート・ヘリックの詩“To the Virgins, To Make Much of Time”との関連もいつも指摘されています。念のために紹介します。

Gather ye rosebuds while ye may,	バラの蕾を摘め、できるうちに
Old Time is still a-flying,	老いた「時」はいつも過ぎ去る
And this same flower that smiles today,	今日は微笑むその花も
Tomorrow will be dying.	明日には枯れていくのだ

「いまを生きる」という映画でこの詩が紹介されています。観てごらん。

でもまあ、吉井さんが鴎外からヒントを得たことは間違いないでしょうね。ちなみにアンデルセンの『即興詩人』の原典は面白くないらしいのですが、我が天才鴎外が和訳することによって文学の域にまで高めたのだとか。すごいですね。

今週のおすすめ

・森 鴎外 『最後の一句』 (岩波文庫『山椒大夫・高瀬舟』に収録)

言葉の持つ力と言いましようか、コミュニケーションの神髄と言いましようか。言葉は発する者と受ける者とが同等の能力を持って初めて有効に作用するのだと鴎外はこの作品で言いたかったと思います。どんな言葉も受け取り手の器量によっては空疎なものになりかねないわけで、聞く力は話す力と同等かそれ以上に大切ですね。

元文三年(1738年)のお話。大阪で船乗業を営む桂屋太郎兵衛が三日後に死刑に処せられると決まった。長女いち十七歳、二女まつ十四歳、養子長太郎十二歳、三女とく八歳、初五郎六歳が太郎兵衛の五人の子どもたち。長女いちが願書を書いて奉行所に願い出ると言い出します。太郎兵衛の実子ではない長太郎を除いて、四人の子どもたちの命と引き換えに父を許してほしいと。父の罪が死刑に値するかどうかと、それを疑ったわけではないでしょうが、いちはとにかく願書を書いて訴えます。初めは相手にされませんでした。が門前での騒ぎが奉行の耳に届き、願書を読んだ奉行は町年寄ともども子どもたちを全員裁きの場に出させます。誰か大人の入れ知恵を疑った奉行はいちを問い詰めます。自分がまつと相談して書いたと堂々と答えるいち。

尋問は続くのですが、最後に「そんなら今一つお前に聞くが、身代わりをお聞き届けになると、お前達はすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることは出来ぬが、それでも好いか。」と言われたいちが「よろしゅうございます」と答えたのち最後の一句を言います。その最後の言葉が奉行の胸に伝えるわけです。あとはお読みください。

BGMは Bob Dylan の *Blowin' In The Wind* でした…。